あはれなることは、下り（形動・体）おはしまし（Ⓢ作者→帝）（過去「けり」体）ける夜は、藤壺の上の御局（みつぼね）の小戸より出でさせ（尊敬「さす」用）給ひ（過去「けり」体）けるに、有明の月のいみじく明かかりければ、（過去「けり」已）「顕証（けんしょう）にこそ（係助）ありけれ。（過去「けり」已）（形容詞・用）（形容詞・用）いかがすべからむ。」と（適当「べし」未）（推量「む」終）仰せ（Ⓢ作者→帝）（尊敬「らる」用）られ（過去「けり」体）けるを、「さりとて、とまらせ（尊敬「す」用）給ふ（Ⓢ粟田殿→帝）べきやう（可能「べし」体）侍らず（Ⓣ）（打消「ず」終）。神璽・宝剣わたり（Ⓢ粟田殿→神璽・宝剣）給ひ（過去「けり」体）ぬるには。」と粟田殿の騒がし（完了「ぬ」体）申し（Ⓚ作者→帝）給ひ（Ⓢ作者→粟田殿）けるは、まだ帝出でさせ（尊敬「さす」用）おはしまさ（Ⓢ作者→帝）（打消「ず」用）ざり（過去「けり」体）ける先に、手（て）づから取りて、春宮（とうぐう）の御方にわたし（Ⓚ作者→春宮）奉り（Ⓢ作者→粟田殿）（完了「つ」用）給ひ（過去「けり」已）てければ、帰り入らせ（尊敬「す」用）給は（Ⓢ作者→帝）むことは、あるまじく（形容詞・用）思し（Ⓢ作者→粟田殿）て、しか申さ（尊敬「す」用）せ（過去「けり」体）給ひ（Ⓚ作者→帝）（動詞「あり」体＋打消当然「まじ」用でもよい）けると（係助）ぞ（Ⓢ作者→粟田殿）。

さやけき影を、まばゆく（形容詞・体）おぼしめし（Ⓢ作者→帝）（形容詞・用）つるほどに、（完了「つ」体）月の顔にむら雲のかかりて、少し暗がりゆきければ、（過去「けり」已）「わが出家は成就するなりけり。」（断定「なり」用）と（詠嘆「けり」終）仰せ（Ⓢ作者→帝）（尊敬「らる」用）られて、歩み出でさせ（尊敬「さす」用）給ふ（Ⓢ作者→帝）ほどに、弘徽殿の女御の御文の（格助・同格）、日ごろ破り残して御身も放たず（打消「ず」用）御覧じ（Ⓢ作者→帝）（過去「けり」体）けるを（Ⓢ作者→帝）おぼしめし（Ⓢ作者→帝）出でて、「しばし。」とて、取りに入り（Ⓢ作者→帝）おはしまし（過去「けり」体）けるほどぞ（係助）かし（終助）、粟田殿の、「いかに、かくはおぼしめし（Ⓢ粟田殿→帝）（尊敬「す」用）ならせ（Ⓢ粟田殿→帝）おはしまし（完了「ぬ」体）ぬるぞ（係助）。ただ今過ぎば、おのづからさはりも出で（強意「ぬ」未）まうで（Ⓚ粟田殿→帝）来（推量「む」終）なむ。」と、そら泣きし（Ⓢ作者→粟田殿）給ひ（過去「けり」体）けるは。

気の毒なことは、（花山天皇が）御退位なさった（夜のことですが、その）夜は、藤壺の上のお局の妻戸からお出ましになられたところ、有明の月がたいへん明るかったので、（帝が）「あまりに目立ってしまうなあ（明るくて気が引ける）どうしたら良いだろうか。」とおっしゃられたのに対して「だからといって、おやめなさることはできません。神璽と宝剣は（春宮様に）お渡りなさってしまったので」と粟田殿が急き立て申し上げなさったことについては、まだ帝がお出ましになられないうちに、（粟田殿が）自ら取って、春宮様に渡し申し上げなさっていたので、（帝が）宮中にお戻りになることは、あってはいけないことだと（粟田殿は）お思いになって、そのように申し上げなさったということです。

明るい（月の）光をまぶしくお思いになっていらっしゃった時に、月の面に雲がかかって、少し暗くなってきたので、「私の出家は成し遂げられるのだなあ。」と（帝は）おっしゃられて、歩き出しなさった時に、弘徽殿の女御からのお手紙で、破り捨てることなく御身から離さずご覧になっていた（手紙）を思い出しなさって、「ちょっと待て。」と言って、取りにお入りなさったのだよ。（その時）粟田殿が、「どうして、そのようにお思いにおなりなさるのですか。今を過ぎれば、自然と（出家の）障害が出てまいりましょう。」と、嘘泣きをしなさったのですよ。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/